上級レベルにおける「読書の時間」
―楽しみながら自律的に読むことを目指した試み―

専任講師　**国頭美紀**
専任講師　**八田浩野**
(2007.9.1受)

要　旨

2006年度４月期１、２組では、学習者が自分で本を選んで自分のペースで楽しみながら読めるようになることと、教師の説明がなくても学びの場になる教室活動を実現することを目指して「読書の時間」の授業を行った。本稿の前半では、この授業を行うまでの経緯と授業の実際を報告する。後半では、授業後に行った学習者へのアンケート及びインタビュー調査の結果から明らかになった問題点と改善点について述べ、このような活動において教師はどのような役割を担えばよいのかについて考察する。

＜キーワード＞　読みの指導の改善　読みの到達目標　自律的に学習する
教師の役割

1．はじめに
2．この授業を行った経緯
3．試みの実際
　3－1．「読書の時間」の目標
　3－2．授業の流れ
　3－3．教師の役割
4．授業で観察されたこと
　4－1．学習者が選んだ本の傾向
　4－2．学習者の取り組みの様子
5．授業実施後の調査
　5－1．調査の目的
　5－2．調査の方法

5－3．調査結果
6．考察と今後の課題
6－1．目標とした能力が習得できたか
6－2．教師の担うべき役割とは
7．終わりに
注
参考文献
資料

1．はじめに

本校の上級レベル[注1]では、読みの指導の改善を目指してさまざまな取り組みを行ってきた。特に2004年度は、これまでの指導の問題点を分析して、上級レベルの読みの到達目標、指導内容を明確にし、多角的に読みのスキルを習得させるための指導を試みた。その結果、新たな課題がいくつか明らかになってきた。その一つは、「学習者がまず読み、その後教師が質問し学習者が答えるという流れの中で、文法項目や語彙・表現などを説明するというこれまで本校の上級レベルで行われてきた授業をいつまで続けるのか」という問題である（国頭・西村2005）。

この問題について教師間で話し合いを進めていく中で、「学習者が自分の力で読むことができるような指導のあり方や、教師の説明がなくても学びの場になるような教室活動などを追究していく必要があるのではないか。その一例として学習者が自分の好きな本を持って来て、同じ教室でそれぞれが違う本を読むという形の授業も考えられるのではないか」というような意見が出された。これらの意見をもとに、2005年度以降も引き続きさまざまな取り組みを行ってきたが、2006年度は「読書の時間」という授業を行い、読みの指導の改善を試みた。

2．この授業を行った経緯

本校の上級レベルでは、学習の到達目標（資料1）を設定して指導を行っているが、その中で読みの到達目標は以下の通りである。

・スキャニングできる。
・スキミングできる。
・知らない言葉があっても意味を類推しながら読める。
・場面全体をイメージすることができる。
・述べられている物事の形や映像をイメージすることができる。
・登場人物の人間関係がわかる。
・登場人物の心情、行間、筆者の言いたいことが理解できる。
・小説などを通して喜怒哀楽が感じられる。
・先を予想しながら読める。
・資料から必要な情報が集められる。
・インターネットから必要な情報が集められる。

これらをまとめると

①書かれている内容を正確に把握できる。
②書かれている内容から書かれていないことをイメージしたり、想像したりできる。
③楽しみながら、日本語で鑑賞できる。
④情報源を探して、自分に必要な情報をそこから読み取ることができる。

ということになる。

このような目標のもと、これまでの上級の読みの授業では、メインテキストの本文の他に、メインテキスト各課の発展教材や日本文学として、ショートショート、詩、短歌、推理小説、エッセイ、ドキュメンタリーなどを短いものは全文、長いものは部分的に読ませてきた。これらの授業は教師がカリキュラムの流れに即して選んだ教材を学習者に与えるというもので、すべての学習者は同じものを読むことになる。また、基本的な授業の進め方は、「学習者が各自で読んだ後、教師が内容などの理解を確認するための質問をし学習者が答えるという流れの中で、教師は文法項目や語彙・表現などを説明する。そしてその後、学習者同士で意見交換をしたり、感想文などを書いたりする」というものである。

しかし、「読んで楽しむ」あるいは「日本語で鑑賞する」という側面から読むという行為を考えると、最終的には母語では誰もが行っているように、「自分に必要なものや読みたいものを自分で選んで、自分のペースで読めるようになること」が読みの到達目標ではないかと筆者らは考えるようになった。そこで、それ

を段階的に実現し、教師の説明がなくても学びの場になるような教室活動を具体化するために「読書の時間」という授業を行うことにした。

3．試みの実際

3－1．「読書の時間」の目標

この試みを実践するに当たり、これまでの経緯を踏まえて教師間で話し合いを行い、以下のような目標を設定した。

①本は教師から与えられるのではなく、自分が読みたいものを探すことができる。
②わからない部分があっても（教師の助けを借りつつ）自分の力で読み通すことができる。
③本を読むことによって、新たな知識を得たり、読むことを楽しんだりできる。
④卒業後を視野に入れ、自分で好きなものを探して読めるという自信をつける。
⑤自分が読んだ本について、ポイントを絞って紹介できる。

上記①～④は、学習者が本を選んで読む時の目標である。このような目標を設定したのは、学習者が自分の読みたいものを自分の目で探し、それを最後まで読み通すことで何かを得たという実感や達成感を持ってほしいと考えたからである。そして、そのことによって学習者が「日本語は教えてもらうもの」という考えから脱し、自分で学んでいく自信に繋げていくことができるのではないかと考えた。

この活動は、学習者が完全に一人きりで本を読むのではなく、大部分を授業で読むというクラス形態の活動である。そのメリットを生かすために上記⑤のような目標を設定し、学習者が自分の読んだ本の内容を口頭で紹介し合った後、各自が短い文章にまとめるという活動を組み入れることにした。この活動のねらいは自分の読んだ本を紹介し合うことで学習者同士の学びの場になっていくことにある。また、紹介する内容を考える際に、自分の読んだことをもう一度振り返り、感想や印象を明確にすることによって、内容理解を深めるという効果も期待できる。さらに、全員の紹介文を一つの文書にまとめて配布し、それを読むことによってクラス全体の達成感が生まれることも期待した。

3－2．授業の流れ

「読書の時間」の授業は、2006年度１、２組において、2006年12月５日から2007年１月26日の期間に計７コマ（１コマ50分）行った。冬休みをはさむ時期に設定したのは、授業時間やその他の時間を使っても最後まで読めなかった学習者がいた場合、冬休みに読み終えることができるように配慮したためである。授業を担当したのは筆者らを含む４人の教師である。

この授業全体の流れは、

①この授業の目標を説明し、どのような本を選べばよいのか教師がアドバイスする。

②学習者は実際に図書館や書店などへ行って本を選ぶ。

③授業の時間とそれ以外の時間を使って本を読む（冬休みが終わるまでに読み終える）。

④クラスメートに読んだ本を紹介する。また、他の者が紹介した本の中から、自分も読めそうなものや読みたいものを探す。

というもので、上記①～③を冬休み前に行い、冬休み後に④を行った。それぞれの授業の内容は、以下の通りである。

１コマ目（2006年12月５日）

内容：「読書の時間」について導入し、学習者は本を選ぶ。

①導入及び目標を提示する

「これまでに日本語の本を読んだことがあるか」「(読んだことがある学習者に対して）それはどんな本か」「日本の作家で知っている人はいるか」などについて聞き、その後、この授業の目標について説明する。ここでは、「自分が興味のある内容で、かつ自分の日本語力でがんばれば読めるという本を選んで、最後まで読み通すこと」が目標であることを説明する。その他に自分が読んだ本をクラスメートに紹介する活動も行うが、あくまでも読むことに目標があることを強調する。そして、この授業全体の流れとスケジュールを説明する。

②本の選び方について説明する

目標を達成するためにはどのような本を選べばよいかについて、いくつかのポイントを挙げて説明する。

[ポイント]

・自分が興味を持っていて読みたいと思う分野の本、例えば自分の専門分野の本や好きなタレントのエッセイ、趣味の本などは日本語が多少難しくても最後まで読み通すことができる。

・内容を大体知っている本、例えばドラマのノベライズ本やドラマや映画の原作、母国語の翻訳で読んだことがある本、またその分野について勉強したことがある本などは内容がわかっているので、日本語が難しくても読み進むことができる。

・子供向けの本、例えば小学校の上級生や中高生向けの本には大人が読んでも面白い本がある。

次に、避けてほしいものとして、絵本などすぐに読み終わってしまうものや、漫画や写真集などのように「読む」というより「見る」本、人に紹介できないような内容の本など例を挙げて説明する。また、読みかけて次々に本を変えることは避けてほしいが、どうしてもという場合のみ1回だけ認めるということを確認する。

③本を紹介する

教師が薦める本の実物を紹介する（紹介した本については資料2参照）。学習者はそれらの本を軽く読んだり、図書館や書店などへ行って本を選んだりする。

2コマ目（12月9日）～4コマ目（12月14日）

内容：学習者は選んだ本を確認し合い、本を読む。

①選んだ本を確認する

始めにどんな本を選んだのかを、3～4人のグループになって簡単に紹介し合う。

②本を読む

本を読んでわからないところは辞書を引いたり、教師に聞いたりすること、また、読み終わってしまった場合は、次の本を選んで読んでもよいことなどを伝える。

学習者が読んでいる間に、教師は各自が選んだ本のタイトルを記入し、その後は、質問に答えたり、授業中の様子をメモしたりする。

5コマ目（2007年1月11日）

内容：本を読み直し、グループに分かれて読んだ本を紹介し合う。

①本を読み直す

クラスメートに紹介するとしたら、どんなことを言えばいいかを考えながら、30分ぐらいかけてもう一度ざっと読み直し、内容を思い出す。

②本を紹介する

3、4人のグループに分かれて本を見せながら、本の内容、面白かったところ、難しかったことなどについて話す。

6コマ目（2007年1月11日）

内容：違うクラスの人と紹介し合った後、紹介文を書く。

①違うクラスの人に本を紹介する

各クラスを半分に分け、1、2組の学習者をミックスして5コマ目と同様にグループで紹介し合う。

②紹介文を書く

タイトル、著者、出版社、発行年、価格の他に150字程度の簡単な紹介文を書くように説明する。その際、文庫本の裏表紙に書かれている紹介文を見せて、どのようなことを書けばよいのか学習者に理解させる。

＊教師は7コマ目までに紹介文を添削しておく。

7コマ目（2007年1月17日）半コマ

内容：紹介文をパソコンで打つ。

添削済みの紹介文を返却し、学習者はパソコンで打つ。

＊教師は、完成した全員の紹介文をまとめる。

授業後

・紹介文を配布し、読む時間を設ける。

・1、2組の学習者全員にアンケートとインタビューを実施する。

3－3．教師の役割

この授業における教師の役割は、大きく3つに分けることができる。まず導入時においては、この授業を行う意義や目標が学習者全員に理解できるように説明することと、すべての学習者が自分で本を選べるようにアドバイスすることである。学習者の中には、自分で日本語の本を選んだ経験がない者もいると予想されるため、教師が薦める本を何冊か紹介することにしたが、その際、学習者が簡単に教師の準備したものを選ばないように、あくまで自分で考えて選ぶように指導することを心がける。

次に、実際に本を読むようになってからの教師の役割は、学習者の質問に答えることである。導入時に学習者に対して、わからない言葉や表現などが出てきた場合は読み飛ばしてもいいし、必要であれば辞書で調べたり、教師に聞いたりするように指導してあるので、辞書で調べてもわからない言葉や表現、内容理解に必要な背景知識などについて質問に答える。

3つ目の役割は、本を読んでいる時の学習者の様子を観察することである。これは学習者の読みのスタイルはさまざまであると予想されるため、それぞれのスタイルを教師が把握できれば今後の読みの指導に役立つのではないかと考えたからである。授業は複数の教師が担当するが、各教師は、学習者の様子を観察して、一人ひとりの様子をメモし、必要に応じて教師間で報告し合って情報を共有する。但し、この授業では観察し記録することにとどめ、教師から見てあまり好ましくない読みのスタイル（例えば過剰に辞書を引くなど）が観察されても、それを変えるようには指導しない。それはこの授業を行っていく過程で、学習者がよりよい読みのスタイルに自ら気づくことを期待したからである。

4．授業で観察されたこと

4－1．学習者が選んだ本の傾向

教師は、資料2にあるような本を実際に授業に持って入り、学習者が手にとって見られるように紹介した。紹介した本は、レベル的に合っているもの、最近話題になったもの、読みやすく楽しいものなどを意識し、担当者自身が面白いと感じたものを選んだ。学習者はその後、自分で本を選んできた（資料3）。教師が紹介した本の中では、ちょうど同時期にドラマ化、映画化され、人気を呼んでい

た『佐賀のがばいばあちゃん』を選んだ学習者が４人ほどいた。そのうち３人は同じクラスだったが、「ちょうど読みたいと思っていた。同じ本を読んでいる人がいてもかまわない」とのことで、そのまま読み進めていた。そのほか、『世界の中心で、愛を叫ぶ』『ウォーターボーイズ』など映画化されてすでに見たことがあったり、題名や、大体の内容を知っていたりする本を選んだ学習者が多かった。

一方、学習者自身が選んできた本の中には教師が知らないものも多かった。携帯小説サイトからベストセラーになった『恋空』をはじめとして、『平面いぬ。』『涼宮ハルヒの憂鬱』など、若い世代ならではの選択をしている。また、『あなたも映画業界で働いてみませんか？』などといったハウツーものを選んだ学習者、『美しい国へ』『鏡の法則』など、そのとき話題になっている新書などを選んだ者もいた。いわゆる現代文学を選んだ学習者は少なかったが、母国にいたときから読みたかったと言って『氷点』を読んでいた者もいた。

全体に、学習者は、教師側が想像した以上に現在日本で読まれている本に関心を持っており、よく知っていると感じた。

４－２．学習者の取り組みの様子

導入後読書をする時間は３コマ取った。大半の学習者が集中して読んでいたようである。時々笑ったりしている者もおり、本の中に入り込んでいる様子がうかがえた。音楽を聴きながら読んでいる者もいた。辞書はほとんど使わずに読み進めている者が数名いたが、他の学習者はたまに辞書を引きながら、読んでいるようであった。わずかだが、辞書を頻繁に引き、ノートにメモを取ることに終始している者もいた。１コマ50分の授業であるが、やはり、後半は集中力が落ち眠くなるので、途中３～５分ぐらいの休憩を取るようにした。教師への質問は１時間に３、４人程度で、言葉の意味などの質問が多かった。

授業後の本の紹介のコマでは、国籍、読んだ本を考慮して３～４人のグループで、紹介と話し合いをした。メンバー、クラスを変えて２度自分が読んだ本を紹介する時間を取った。発表では、文庫本の裏面のあらすじや解説を上手に利用して説明する学習者もいた。また、全体を話そうとするのではなく、あるエピソードだけを取り出してうまく聞き手の興味をひきつけるような話し方ができている者もいた。２回目のほうがやり方を心得て、上手にできた者も多かった。一方、

同じことを２度話すということで飽きてしまった者も見受けられた。紹介された本に興味を示し、その場で借りていた学習者もいたようだ。また、相手の読んだ本にもかなり率直な感想を示していたようで、「子どもの読む本だ」とコメントした者もいたが、本を読んだ者はそれを冷静に受け止め「大人になってから読むと見方が変わる」と答えていた。また、自分の興味を持った点を熱心に語ったものの、聞き手にそれが伝わらなかったような場面もあった。その後、紹介文を書いたが、これも本の帯や裏表紙にある紹介を参考にしながら、自分の言葉で短く簡潔な文章を書いていた。

学習者の作文は、後日２クラス分をプリントにし、読書案内のような形で配布した（資料５）が、プリントを熱心に読んでいる姿が印象的だった。

５．授業実施後の調査

５－１．調査の目的

本校日本語科では、活動や発表準備などの特定の場合を除けば、授業中に学習者が一人ひとり異なった教材に取り組むという形態で授業が行われることはほとんどない。また、アジア各国からの学習者が多く、母国での授業も教師主導型が多いと思われる。そこで、このような活動をどう捉えているのかを知るためにアンケートとインタビューの調査を行った。

５－２．調査の方法

授業終了後の２月上旬にアンケートと一対一のインタビュー調査を行った。調査に協力してくれたのは、アンケートについては2006年度１、２組に在籍していた36名（１組18名、２組18名。出身は韓国15名、タイ１名、台湾14名、中国６名）全員、インタビューはそのうちの34名である。

アンケートについては、事前に担当教師間で項目を検討し、授業時間に記入してもらった。その後、アンケートの回答についてさらにいろいろな角度からインタビューを行った。所要時間は人によって異なるが、大体、10分から15分程度であった。

5－3．調査結果

アンケート結果については、資料4を参照していただきたい。ここでは、アンケートとその後のインタビューの内容から見えてきたことを述べる。

まず、読んだ時間についてであるが、速読をした者が半数弱だった。読みきった者も途中でやめた者もいた。残りの半数はかなり時間をかけている。途中でやめた理由で多かったのは、休みに入り帰国してしまったりして読む気がなくなってしまったことだった。一方読みきった者は、冬休みを利用して少しずつ読んでいった者が多かった。

実施時期は「ちょうどいい」という答えが約3分の1を占めたが、もっと早くしたほうがいいという答えもかなり多く、7月（中級Ⅱ終了時）、9月（上級Ⅰ学習時）などの時期を挙げていた。学習者自身が本校での学習がまだかなり残っている段階で行えば、もっと早くいろいろな本に出会うチャンスがあったのではないかと考えているようだった。

「読んでいる時に困ったことや大変だったことがありますか」という質問に対しては、漢字の読みや辞書にない言葉などと答えた学習者が多かった。しかし、「あった」と答えた者も「なかった」と答えた者も、辞書をいちいち引くことはせず、文脈から判断して意味を推測しながら読み進めたようだ。

また、授業時間を使ってこのような読書を行ったことについてであるが、一口に「よかった」と答えた者でも、その理由はさまざまだった。かなり多くの学習者が「自分では読もうと思っても、なかなかできないのでこのような時間を授業で取ったことがよかった」という気持ちのようだ。また、「授業でやると先生にわからないところを聞ける」「集中して読める」という答えもあった一方、「先生には何度も聞きづらいし、友達も読んでいるので友達にも聞きにくい」とか「テストやクイズ、宿題などのことが気になって集中できない」という意見もあった。また、反対意見には、「もともと読書が好きではないので、そのような時間は必要がない」という答えもあれば、「隣に人がいると集中できない、寝る前に読むのが習慣なのでそのほうがいい」という答えもあり、読書好き、読書嫌い双方の意見があることがわかった。また、事前に考慮しておくべきことだったが、「読み」の授業時間を全て午後にとってしまったことから、「眠くなるので午前中にしてほしかった」という意見もあった。

読むだけでなく、クラスメートに紹介する時間を取ったこと、学習者が書いた

作文を読書案内のようなプリントにし、学習者全員に配布したことについては、この二通りのやり方でやったことに対して肯定的意見が多かった。それまでは、難しそうだと思っていた本でも、実際に読んだ人から話を聞くことで興味を持てたり、文章を読んで、自分も読めそうだと感じたりしたようだ。みんなの読書案内を読み、作文の上達を感じた、という感想もあった。

今までに本を読んだ経験という項目では、この設問に「ある」と答えた者は8の「これから読んでみたい本があるか」という設問にも「ある」と答えた場合が多かった。

これから読んでみたい本があるか、という質問とともに、どうしてその本を読もうと思ったかも聞いてみたところ、映画、母国でも話題になっている、などの答えが多かった。書店ではベストセラーの紹介などをしているところが多いが、それを見て読もうと思ったり、書店で文庫本の裏の紹介文を読んで選んだり、表紙が気に入って買ったりもしているようだ。中には「本が好きなのでよく本屋へいく。新しい本をチェックし、買うときはブックオフなどで買う」という日本人のような行動様式をすでに取っていたり、立ち読みによく行ったりするという学習者もいた。

また「ない」と答えた者に、理由を聞いたところ、「何を読んだらいいのかわからない」という答えが非常に多かった。書店には本があふれている一方で、自分が必要としている情報を得られず、本を読んでみようという気持ちを持ちつつも本が選べないという学習者の現実があるようだ。

6．考察と今後の課題

6－1．目標とした能力が習得できたか

「読書の時間」の授業は、学習者が自分の読みたいものを自分で選んで、自分のペースで楽しみながら読めるようになることと、教師の説明がなくても学びの場になる教室活動を実現することを目指して行った。授業後のアンケートの結果からは、多くの学習者はこの活動に対して「やってよかった」という肯定的な評価をしていることがわかったが（資料4参照）、今回の試みでこれらの目標はどの程度達成できたのであろうか。まず、目標とした能力が学習者についたかどうかという点から考えてみたい。

この授業で学習者に養わせたかった能力は、「自分のペースで最後まで読むことができる力」「読むことを楽しめる力」「学習者が自分の力で読みたいものを探せる力」の３つである。１つ目の「自分のペースで最後まで読むことができる力」に関しては、１冊最後まで読みきった学習者は36人中21人で、６割弱の学習者しか目標を達成することができなかった。最後まで読み通すことができなかった原因として、５－３．で述べたように冬休みに帰国したため、読む気がなくなってしまったことを挙げた者が多かった。このことは、冬休みを使えば最後まで読めるだろうという教師側の狙いがはずれてしまったと言える。

では、「自分のペースで読める力」については、どうであろうか。インタビューの結果から、ほぼ全員の学習者が読み進める過程で、本を１冊読み通すための読み方に変えたことが明らかになった。５－３．でも述べたように、学習者の多くは読み進むうちに、辞書を引いて意味を確認する回数が減り、わからない部分は読み飛ばすことができるようになった。その理由として、「いちいち辞書を引くのは面倒だし、辞書を引くと本を読んでいてもだんだん面白くなくなる」ことをインタビューの中で挙げた者が多かった。「途中からわからない言葉を調べないで飛ばして読んだら面白くなった」、「１度読んだが、わからないところがあったのでもう一度読んだ。不思議な話だが、ストーリー展開で始めは難しくてわからないと思ったところも、読み進めていくうちにわかって、おもしろくなってきた」というインタビューでの学習者のコメントから、始めはわからない言葉や表現が出てくるたびに辞書を引いていたが、辞書を引き続ける煩わしさからそれを止めて読み進めたところ、ストーリーの理解にはさほど支障がないことに気づき、ストーリーの面白さを感じることができるようになったという学習者の姿が浮かび上がる。また、読んだ時間に関しても速読をした者と時間をかけて読んだ者とが半数ずついたが、これは学習者が読み方を自分で選んだ結果である。時間をかけて読んだ学習者の中には「味わって読む本（『天国はまだ遠く』）だったので、時間がかかった。共感できるところは線を引きながら読んだ」と述べた者もいた。授業以外に読んだ場所も、自分の部屋、電車の中、アルバイト先（休憩時間）などさまざまで、授業で半分ぐらい読んで残りは寝る前に１時間ぐらいずつ半月ほどかけて読んだ者もいた。以上のようなことから、ほとんどの学習者は自分のペースで読む力をある程度身につけることができたと思われる。

２つ目の「読むことを楽しめる力」が養われたかどうかについては、数量で表

すことは難しいが、4－2．で述べたように「授業中は大半の学習者が集中して読んでおり、本の中に入り込んでいる様子がうかがえた」という教師の観察や、学習者へのインタビューの結果から、ほとんどの学習者が楽しみながら読む力を養うことができたと思われる。

3つ目の「自分の力で読みたいものが探せる力」を養うために、今回の試みでは、本の選び方についていくつかのポイントを挙げて説明した後、教師が薦める本を紹介したほか、学習者同士で自分が読んだ本を紹介し合った。しかし、インタビューの結果から「大量の情報の中から自分が必要としている情報を得られず、読んでみようという気持ちを持ちつつも本が選べない」という学習者の現実はこの活動を行った後も依然存在していることが明らかになった。インタビューの中である学習者は「どんな本を読んだらいいかという情報があると安心できる。今までたくさん本を買ったが読みきった本はなかった。1ヶ月に1回でもいろいろ話題の本を紹介したらどうか」と提案している。大量の情報の中から必要な情報を選ぶ力を養うためにどのような指導をしていけばよいのかについては、引き続き考えていかなければならない課題であるが、例えば、学習者が興味を持ちそうな若者向けの雑誌や新聞の書評などを定期的に紹介することも考えられる。また、それと同時に、最近話題になっている本や読もうと思って買った本、読んで感動した本などについて、学習者と教師がクラス全体で情報交換をする時間を定期的に持ち、情報をキャッチするためのアンテナを張る体制を作ることも有効ではないかと思われる。

6－2．教師の担うべき役割とは

この活動は企画した際にも、また、授業を実際に実施した際にも、「ここでの教師の役割はいったい何か」ということを考えさせられる活動だった。すでに述べたように上級では、日本語で「鑑賞できる」「情報が収集できる」、「自律的に学習できる」ということを学習目標として掲げているが、その目標を実現するために教師は何をすべきかという点に関してはまだ試行錯誤の状態といえる。

本校紀要19号（国頭・西村2005）で述べられているとおり、学習者は教師から詳しい説明を受けることに満足感を覚えていることも事実であり、そのような満足感と自分で読む力を育てる指導は、相反する点もあろう。また、教師側も今までの「説明する」読みの授業という発想を転換する必要があった。事実、「授業

中に本を読ませているだけでいいのか、教師としての役割を果たしているのかという葛藤があった」と授業担当者は言っている。また、「もし自分が語学学校に行ったらこういう授業をどう思うだろうかと考えた」という教師もいた。筆者自身も3コマの「読書」の授業の一部を担当したが、集中して読んでいる学習者に対しては「この学習者ならこのような授業をしなくても自分の時間を使って一人で読んでいけるのではないか」と思い、途中で集中力が切れ、飽きてしまったような学習者には「一人で読むのではなく、みんなで同じものを読み進める授業のほうが集中して読め、よかったのではないか」などと思い悩むこともあった。教師自身が「教師主導型」授業が最も有効な授業形態ではない、ということをしっかりと認識する必要を感じた。

筆者らはこの活動を実践し、また、インタビューやその後の振り返りによって、教師の役割について考えをめぐらせてきた。そして、いくつかのポイントがあるのではないかと考えるに至った。

①情報の整理、ガイド役：学習者が必要な情報をどうやって手に入れればいいかを提示し、また学習者が到達目標を設定するためのアドバイスを適切に行う。今回の場合、本を選ぶために必要な情報を与え、学習者が自分の日本語力を判断して、読み進めることができる本を選ぶための援助を行う。

②内容理解のための援助者：これは従来型の授業の中でも教師が果たしてきた役割である。教材について説明を行ったり、学習者の質問に答えるという形で進められる。今回の活動では学習者が選んできた本（教材）が一人ひとり違うため、学習者の疑問を受けて、それを解消するように答えていくことになる。

③学習を進めるための進行役、タイムキーパー：学習者が目標を達成するために適切な助言をしたりして、学習活動のリズムを作っていく。今回の活動の場合は学習者が選んだ本を読み進めていくことができているかをきちんと把握し、それができない場合に何らかの対応を取ることと言える。

④学習者の自己評価の援助者：学習活動全体を通して、到達目標を達成したかどうか、身につけられた能力はどのようなものか、また、欠けている力は何で、今後どのようにそれを獲得していくべきなのか、などについて学習者自身が評価し、自覚できるように援助する。今回の場合は、単に選んだ本を読み通せたかどうかではなく、この「読書の時間」の活動を通して、どのよう

な読み方ができるようになったか、また、1冊の本を読むためには、どんな読み方をしなくてはいけないのか、自分が母語でしていることはどんなことで、日本語での読み方とどこが違うのか、などを確認できるように手助けをすることも教師の役割と言える。

今回の活動で、教師に求められた役割は、以上ではなかったかと考える。しかし、実際には、学習者が身につける能力については事前にある程度明確化していたものの、教師が何をするのかについては、暗中模索の状態で進めていた。そのため、①や③についても不十分な形でしか達成できず、また、④については、授業後のインタビューをすることによって、学習者に振り返りのチャンスを与えることはできたが、意識的に自己評価するような活動としては組めずに終わった。今後はさらに具体的に教師の役割を考えていく必要がある。

7．終わりに

今回の「読書の時間」の活動を通して、言語学習において「自律的に学習する」とはどういうことか、ということを考えさせられた。

学習者にとって教師の説明がなくては理解できない事柄、あるいは指導抜きには乗り越えられない壁といったものは存在するだろう。それを越えられるように教師側が主導して学習を進めていくことも確かに必要である。しかし、だからといって、教師の説明を受けて、与えられた教材を常に学習者に100%理解させることを教師が目指していていいのだろうか。卒業後、日本の専門学校などへ進学した場合、そこで学習者が直面する日本語の環境は日本語学校でのそれと大きく異なる。また、それ以外の進路の場合でも「いつでも教えてもらえて、全部理解できる」というような環境で日本語を使える者はほとんどいないだろう。筆者らはそのような環境へと学習者を送り出す前に、「自律的に学習できる」ことが必要だと考えてきた。

今回読みに関して言えば、上級の目標として掲げた「鑑賞できる」「情報が収集できる」という点を考えて授業に取り組み、その中で「自律的に学習できる」ということが少し見えてきた。それは、目標を設定して、それに至るための情報を得、学習活動を遂行し、それを正しく評価できる総合的な能力を持つ、ということである。そのためには、「学習内容（知識）の獲得」以外の力を段階的に身

につけていく必要がある。

今回のこの活動も、これだけを突然行ったわけではない。学習者にはさまざまな発表活動などを通して、自分の目標を設定し、自分自身でフィードバック、評価する時間を設けて自己モニターをする機会を作ってきた。また、上級の教科書本文、発展教材を通じて、さまざまな読み方に慣れてきた。そのような活動を通して、教室活動について新しい視点を持ったり、自分の学習スタイルを見直したりすることが少しずつできていたのではないかと考える。不十分ではあるが、そのような教師側の働きかけがあったからこそ、この活動が学習者にほぼ受け入れられたと言えるのではないだろうか。今後はさらに「自律的に学習できる」という目標を達成するために教師は何をすればいいのか、具体的な指導のあり方や役割を考えていきたい。

注

(1) 本校での上級レベルとは『文化中級日本語Ⅱ』の学習を終え、『テーマ別上級で学ぶ日本語』をメインテキストとして学習するレベルで、標準的な学習時間は副教材を含めて約600時間である。

参考文献

(1) 国頭美紀・西村学 (2005)「上級レベルにおける読みの指導—『上級で学ぶ日本語』を使って—」『文化外国専門学校日本語過程紀要』第19号

(2) マルカム・S.ノールズ (2005)『学習者と教育者のための自己主導型学習ガイド』明石書店

資料1　2006年度1、2組　上級の方針

1、2組における上級の学習について

上級では卒業後にむけて各自がそれぞれのやり方で、日本語のステップアップをしていけるようにしたい。そのためには、学習者が自分自身で、何を学べば良いのか（必要な学習項目の選択）、どこまでできればＯＫとするのか（到達目標の設定）、どう学べばよいのか（学習方法の選択）を決めていけるようにしていきたい。

到達目標のイメージ

1．内容が把握できる。（読む・聞く）

・スキャニングできる。
・スキミングできる。
・知らない言葉あっても意味を類推しながら読んだり聴いたりできる。
・場面全体をイメージすることができる。
・人間関係が理解できる。
・述べられている物事の形や映像をイメージすることができる。（絵や写真などの視覚資料に頼らず、イメージを膨らませることができる）
・述べている人の気持ちを類推することができる。

2．日本語で鑑賞できる。（読む・聞く）

・小説やドラマなどについて、登場人物の心情、行間、作者の言いたいことが理解できる。
・先を予想しながら小説などを読んだりドラマを見たりできる。
・小説やドラマを通して喜怒哀楽が感じられる。
・日本の文化的な背景も意識できる。

3．リソースを生かしてプロダクションできる。（話す・書く）

・聞いたり読んだりした内容が的確にまとめられる。
・聞いたり読んだりした内容がわかりやすく述べられる。
・自分の体験したことがわかりやすく述べられる。

4．豊かな表現力を習得する。（話す・書く）

・目的や場面に応じて語彙や待遇表現が変えられる。
・ひとつの意味について複数の表現や言い回しが使える。
・自分に足りない表現を辞書を用いるなどして増やせる。
・日本の文化的な背景も意識できる。

5．日本人と支障なくコミュニケーションができる。（聞く・話す）

・日本人の日常会話がほぼ理解でき、理解できない部分は確かめられる。
・質問に対して的確に答えられる。
・自分の言いたいことがほぼ言える。
・会話が長く続けられる。
・場面や状況に応じて自分の話す内容や長さが調節できる。

・冗談を理解したり、自分から言ったりできる。
・日本の文化背景も意識できる。

6．説得力のある話し方、書き方ができる。（話す・書く）

・物事を順序だてて説明できる。
・根拠や理由が具体的に述べられる。
・自分の経験を例に挙げながら説明できる。

7．情報が収集できる。（卒業発表など）

・自分が求めている情報はどうすれば集められるか考えられる。
・インターネットを利用して情報収集ができる。
・論文などの資料から必要な情報が集められる。
・アンケートなどを作成して情報が集められる。

8．プレゼンテーションができる。（健康食品の発表、卒業発表など）

・伝えるべきことを選んで的確に伝えられる。
・相手がわかりにくい点を予測し、工夫できる。
・レジュメが書ける。
・説得力ある話し方ができる。
・的確に質疑応答ができる。

9．自律的に学習できる。（全体を通して）

・日本語の学習に関して自分がどうなりたいかイメージできる。
・目標に向かって計画を立てることができる。
・立てた目標を修正しながら学習を進めることができる。
・覚えるべきもの、使えるようにすべきものなどが取捨選択できる。
・これが重要そうだと予測できる。
・より適切な表現を選んで使おうとする姿勢がある。
・これでよかったかと自分の日本語を疑ってみる。
・自分の日本語が正しいかどうか判断できる。
・間違っていると思ったら正しく直そうとする。
・正しい表現がわからなくても伝えるべきことが伝えられる。
・日本語を学習する上で自分の長短所がわかっている。
・日本語の問題が生じた時に解決するための方策を持っている。

資料2　教師が紹介した本

あさのあつこ（2003）『バッテリー』角川文庫
石坂啓（1999）『コドモ界の人』朝日文庫
イソップ著、河野与一編訳（2000）『イソップのお話』岩波少年文庫
小川洋子（2003）『博士の愛した数式』新潮社
片山恭一（2001）『世界の中心で、愛を叫ぶ』小学館
黒柳徹子（1984）『窓ぎわのトットちゃん』講談社文庫
さくらももこ（2004）『さくらえび』新潮文庫
島田洋七（2004）『佐賀のがばいばあちゃん』徳間文庫
島田洋七（2005）『がばいばあちゃんの笑顔で生きんしゃい』徳間文庫
鈴木清剛（2002）『ロックンロールミシン』新潮文庫
梨木香歩（2001）『西の魔女が死んだ』新潮文庫
野口健（2003）『落ちこぼれてエベレスト』集英社文庫
ビートたけし（1995）『たけしくん、ハイ！』新潮文庫
三谷幸喜／文、唐仁原教久／絵（1999）『俺はその夜多くのことを学んだ』幻冬舎文庫
室井滋（2004）『ふぐママ』講談社文庫
茂木大輔（2006）『オーケストラは素敵だ』中公文庫
矢口史靖（2001）『ウォーターボーイズ』角川文庫
湯本香樹実（1994）『夏の庭』新潮文庫
吉本ばなな（2002）『キッチン』新潮文庫

資料3　学習者が選んだ本

1組
あさのあつこ（2003）『ガールズ・ブルー』ポプラ社
安倍晋三（2006）『美しい国へ』文春新書
市川拓司（2003）『いま、会いにゆきます』小学館
片山恭一（2001）『世界の中心で、愛を叫ぶ』小学館
J.K.ローリング著、松岡佑子訳（2006）『ハリーポッターと謎のプリンス』静山社
島田洋七（2004）『佐賀のがばいばあちゃん』徳間文庫
SCREEN編（2006）『あなたも映画業界で働いてみませんか？』近代映画社
高橋美保（2006）『スッキリわかる心理学』アスカエフプロダクツ
谷川流（2003）『涼宮ハルヒの憂鬱』角川スニーカー文庫
梨木香歩（2001）『西の魔女が死んだ』新潮文庫
宮部みゆき（1999）『長い長い殺人』光文社文庫
村山由佳（1996）『天使の卵』集英社文庫
矢口史靖（2001）『ウォーターボーイズ』角川文庫
吉田紀子・雄生（2006）『涙そうそう』幻冬舎文庫
よしもとばなな（2006）『デッドエンドの思い出』文春文庫
リリー・フランキー（2005）『東京タワー』扶桑社

2組
青木由香（2006）『台湾ニイハオノート』JTBパブリッシング
イソップ著、河野与一編訳（2000）『イソップのお話』岩波少年文庫
江國香織（2004）『ウエハースの椅子』ハルキ文庫
乙一（2003）『平面いぬ。』集英社文庫
片山恭一（2001）『世界の中心で、愛を叫ぶ』小学館
さくらももこ（2006）『ももこの宝石物語』集英社文庫
J.K.ローリング著、松岡佑子訳（2006）『ハリーポッターと謎のプリンス』静山社
島田洋七（2004）『佐賀のがばいばあちゃん』徳間文庫
島田洋七（2005）『がばいばあちゃんの笑顔でいきんしゃい』徳間書店
瀬尾まいこ（2006）『天国はまだ遠く』新潮文庫
ソフィーキンセラ著、飛田野裕子訳（2003）『レベッカのお買いもの日記』ヴィレッジブックス
田中美和（2006）『いまも、ここにいる―ひとつの命と七つの宝石の物語』学習研究社
蝶々（2004）『小悪魔な女になる方法』大和出版
西本鶏介編（2004）『日本漫談』多楽園
野口嘉則（2006）『鏡の法則』総合法令出版
三浦綾子（1982）『氷点』角川文庫
美嘉（2006）『恋空』スターツ出版
水野良（1998）『黒衣の騎士』角川スニーカー文庫
宮部みゆき（1998）『火車』新潮文庫
吉本ばなな（2002）『キッチン』新潮文庫

資料4　読書の時間　アンケート結果（回答36人）

1．どんな本を読みましたか。　（資料3）

2．本は最後まで読みましたか。

はい	21人
いいえ	15人

3．授業以外に（自宅などで）何時間ぐらい読みましたか。

5時間以下	20人
10時間ぐらい	4人
15時間ぐらい	2人
20時間以上	3人
30時間以上	4人
不明	3人

4．読んでいる時に困ったことや、大変だったことがありますか。

あった　18人

固有名詞　漢字　方言　カタカナ

辞書にない言葉　お年寄りの言葉　慣用句

なかった　18人

5．授業時間を使ってこのような読書をしたのはよかったと思いますか。

よかった	30人
微妙	1人
必要ない	5人

6．今までに授業以外で自分で（日本人向けに書かれた）日本語の本を読んだことがありましたか。

ある　19人

『星の王子様』『ラブレター』『佐賀のがばいばあちゃん』

『チーズはどこへ消えた』『孤独と不安のレッスン』
村上春樹の本　ビジネス書　心理学本　旅行記　など
ない　17人（雑誌やマンガのみを含む）

7．クラスメートの読んだ本を紹介してもらいましたが、どう思いましたか。その中で特に印象に残ったものはありますか。
『今も、ここにいる　ひとつの命と七つの宝石の物語』『平面いぬ。』
『天使の卵』『ウエハースの椅子』『小悪魔になる方法』
『佐賀のがばいばあちゃん』『涼宮ハルヒの憂鬱』
『世界の中心で、愛を叫ぶ』『レベッカのお買い物日記』
『長い長い殺人』　台湾の紹介の本　など

8．これから読んでみたい本はありますか。
ある　25人
『東京タワー』『佐賀のがばいばあちゃん』『Fine Days』
『涙そうそう』『陰日向に咲く』『言いまつがい』『華麗なる一族』
『天使の卵』『冷静と情熱の間』『鉄道員』『平面いぬ。』
『世界の中心で、愛を叫ぶ』『天国はまだ遠く』『ウエハースの椅子』
『キッチン』　星新一の本　さくらももこの本　夏目漱石などの有名な作家の本など
ない　11人

9．実施した時期はどうでしたか。(回答19人)
ちょうどいい　10人
もっと早いほうがいい　5人
もっと遅いほうがいい　2人
いつからでもいい　2人

資料５－１　本の紹介文（１）

１組　こんな本はいかが

＊学習者が書いた原文をできるだけ尊重した。

①佐賀のがばいばあちゃん

著者：島田洋七　　出版社：徳間書店
出版年：2004年　　値段：514円

昭和33年、筆者が貧乏のせいで、お母さんから離れ広島から佐賀の田舎のおばあちゃんに預けられ、小学校２年から中学校卒業までの、おばあちゃんと暮らした時の話である。おばあちゃんも貧乏だったが、おばあちゃんの考え方は楽観的だった。辛いことも、苦労も、どういうふうにとらえるかによって大変になったり、楽しいことになったりするというふうな考え方を持っているおばあちゃんの生活を読みながらこころが温かくなった。

②涙そうそう

著者：吉田紀子、吉田雄生　　出版社：株式会社幻冬舎
出版年：2006年　　値段：495円

亡き母の「タコライス屋」をもう一度出すという夢を持って、ひたむきに生きる洋太郎。彼には別々に暮らす、血のつながらない妹・カオルがいる。カオルの高校入学をきっかけに、兄と同居することになるが、洋太郎と恋人・恵子の間に微妙な感情が生じ始める。そして、洋太郎は自分の中にある特別な思いに気づく。沖縄を舞台に描かれた、恋より切ない愛の物語。

③長い長い殺人

著者：宮部みゆき　　出版社：光文社文庫
出版年：1999年　　値段：590円

刑事の財布、強請者の財布、死者の財布から犯人の財布まで、10個の財布が物語る持ち主の行動、現金の動きが予期せぬ重大事件をあぶりだす。宮部みゆきさんにとって小説づくりは面白いお話を作ることだけでは不十分で、それに最も適した見せ方をするための工夫が伴っている。ストーリーを直接描くことを避け、間接的にひとつひとつのエピソードがつながるようになっている。読み進めないと全体的に理解できない。一度手に取った人は、一気に最後まで読み終えるだろう。

④ウォーターボーイズ

著者：矢口史靖　　出版社：角川書店
出版年：2001年　　値段：438円

唯野男子高校水泳部の部員は鈴木ただ一人。３年間水泳部に在籍してきたが一度も

勝ったことがない。さっさと引退しようと思ったとき、新しいきれいな顧問がやって来た。学生達は入部しようと水泳部に殺到した。しかし、彼女がやりたいのはシンクロナイズドスイミングだった。でも妊娠している先生は突然子供が生まれそうになり、産休に入ってしまった。残った５人は文化祭で上演するため、どうにかして練習しなくちゃ…。爆笑の高校青春シンクロストーリーだ。

⑤天使の卵

著者：村山由佳　　出版社：集英社文庫
出版年：1996年　　値段：390円

19歳の予備校生の男の子は８歳年上の精神科医の女性に一目ぼれ、二人が恋に落ちたという感性がみずみずしい純愛小説である。複雑な三角関係そして主人公それぞれの悲しい物語は見所だと思う。内容はわりと平凡だと思うが、人物の内心の描き方が実にこまかくて感動させる作品だ。特に、ヒロインは最後死んでしまってしかもお腹には二人の子供がいたという結末は読むたびに涙がこぼれてしまう。「愛」というのは年と関係なく、心と心の絆だと信じたい。愛している人は死んでしまってもこの純粋な愛は永遠にとまらない。

⑥世界の中心で、愛をさけぶ

著者：片山恭一　　出版社：小学館
出版年：2001年　　値段：1400円＋税

日本のみならず、韓国をはじめ、中国、台湾に至るアジアの各国でドラマや映画などで大旋風を呼び起こした片山恭一の「世界の中心で、愛をさけぶ」という作品。皆、ご存知であると思うが、改めて簡単に紹介させてもらう。主人公である男の子朔太郎と女の子のアキ。この２人のいかにも美しくて悲しい物語である。主人公のアキが白血病で死んだところからこの物語が始まる。アキの死で涙が枯れるほど哀しんでいる朔太郎の目線で書かれ、そのアキとの美しき青春が思い出されるような感じのストーリー。読んでみると、思わず涙があふれそうになってしまう愛の物語である。

⑦涼宮ハルヒの憂鬱

作者：谷川流　　出版者：角川書店
出版年：2003年　　値段：514円

キョン君は子供の頃、サンタクロースや宇宙人や超能力など不思議なことは本当だと信じていた。でも、だんだん大人になってそれは現実には存在しないことがわかった。そんな時、涼宮ハルヒと出会った。わがままで、自分が面白いと思えることを求

資料５－２　本の紹介文（２）

め続ける涼宮ハルヒはバカだと思ったけど、なんとなく一緒に行動して不思議なことを探した。そして、宇宙人とか超能力とか不思議なことが実は周りに？一見したところの日常が、超日常と化した物語である。

⑧美しい国へ

著者：安倍晋三　　出版社：文藝春秋社
出版年：2006年　　値段：750円

この本は安倍さんが始めて書いた本だ。彼は自分の国に自分の考え方を言った。マスコミについてとナショナリズムについて話している。最初は政治の話ばかりで、私はよくわからなかった。でも、気に入った部分がある。安倍さんは本の中で日本はどんなの国なのか詳しく紹介していると思う。だから、外国人に日本を理解してもらえるように、外国人を「いらっしゃいませ」という気持ちで歓迎するという彼の考え方はとてもいいことだと思ったから、安倍さんのこういう気持ちをぜひみんなに紹介したい。

⑨西の魔女が死んだ

作者：梨木香歩　　出版社：新潮社
出版年：2001年　　値段：400円

主人公は舞という女の子。舞は中学の生活に慣れないから、学校をやめて田舎に住んでいるおばあさんのところへ行って、しばらくおばあさんと暮らしている。外国人のおばあさんは魔女だから、舞に魔女のことを教えてくれる。「魔女のこと」はつまりなんでも自分で決めるということだった。それを守ったら、幸せになれると舞は信じている。それで、お父さんの転職をきっかけに舞も新しい学校に入ることにした。おばあさんはなくなったけど、舞はおばあさんのことを忘れず新しい生活を始めた。

⑩スッキリわかる心理学

作者：高橋美保　　出版社：明日香出版社
出版年：2006年　　値段：1500円＋税

人が生きていくことは一人でできることではなく、他人との出会いの連続である。その仕組みの中の原理を研究することが心理学だが、現在は人と人との関係のみならず、民族、社会、軍事や教育のことにまで至っている。この本は人間の心理だけ扱っているが、占いや血液型で人の性格を判断したりすることがうそに近いというような軽い部分から、欲望や犯罪と心理の関係についてまでいろいろなところを心理学と結んで書いている。新しいものの見方ができるいい機会になりそうだ。

2組　こんな本はいかが

①今も、ここにる。ひとつの命と七つの宝石の物語

著者：田中美和　　出版社：学習研究社

出版年：2006年　　値段：925円

この小説は事実をもとに再構成したものだ。第三者の姉の視点から事故が起こった妹のことについて物語っている。事故で脳死段階になった妹は生前に臓器移植を望んでいた。でも、その希望は両親からみると最初、賛成しかねるものだったが姉の努力で両親を説得した。小説の内容はただ臓器移植のことだけではなく家族の感情や命の意義などのことも述べられていた。涙は流さなかったがしみじみと胸を打たれる話だった。

②鏡の法則

著者：野口嘉則　　出版社：総合法令

出版年：2006年　　値段：952円＋税

「私たちの人生の現実は、私たちの心の中を映し出す鏡である」という法則が「鏡の法則」だ。私たちは鏡を見れば、自分の姿を知ることができる。同様に人生に起きていることを見れば、自分の心の中を知ることができるわけだ。この本は実話を素材として書かれているから、誰もが共感できる本だと思う。人生の問題を根本的に解決するためには、自分の心の中の原因を解消する必要がある。心理学者の指導のもとに、具体的問題を解決できるようになっている。ぜひ、その大切な法則にしたがって、自分の問題を解決してみてください。

③恋空

著者：美嘉　　出版社：スターツ出版

出版年：2006年　　値段：1000円

この本は普通の女子高校生が初恋を経験することを書いた本である。内容について少し紹介すると、恋というものがどんなものか全然知らなかった女子高校生が一人の男子高校生を愛するようになったて変わった生活や身近に起こっている様々な事件などが書いてある。またこの本は高校生達を主人公にした本だけあって最近若者達の間で使われているいろいろな面白い言葉が書かれてるから若者達の新しい言葉を勉強してみたいと思っている人に勧めたい。

資料５－３　本の紹介文（３）

④イソップのお話

著者：イソップ（河野与一編訳）　　出版社：岩波書店
出版年：2000年　　値段：720円

「きつねとからす」や「肉をくわえた犬」など私たちがごく小さい頃から絵本や教科書などを通して知った「イソップのお話」。今回は初めから終わりまで読んで、とても感動したり、啓発されたりした。人間ではなく動物を主人公として語られていたので、面白くて飽きなかった。わかりやすい物語から深刻な生活や人生の道理が引き出され、いろいろと考えさせてくれた。以前の「イソップのお話」に対するイメージは子供の教育のための本というだけだったが、実際によく味わったら、子供のみならず、大人にも純粋な気持ちを思い出せたり、心を暖かくしたりする貴重な宝物になる本だと言えると思う。

⑤キッチン

著者：吉本ばなな　　出版社：新潮社
出版年：2002年　　値段：540円

主人公にとって、キッチンは一番安心できて、雰囲気がいい所だと思います。作者は小さい時から、祖母と一緒に生活していました。でも、急に祖母がなくなってしまいました。一人での生活は、寂しく感じたから、引っ越したいと思いました。その時、奇妙な縁で、雄一と彼の母（実は男）と同居することになります。同居している三人の自然な日常が書かれていて、雰囲気が伝わってきます。読んだあと、心が温くなります。

⑥レベッカのお買い物日記

著者：ソフィーキンセラ　　出版社：ヴィレッジブックス
出版年：2003年　　値段：760円

あなたは“SALE”の看板を見たらどきどきする？　この本の主人公、レベッカはお買い物が大好きで可愛い服や靴を見たら買わずにはいられない人。金融関係の雑誌社でお金の使い方について記事を書くジャーナリストなのに自分はお買い物に夢中で借金を作ってしまう憎めない25歳のお嬢さん。でもついには自分が置かれた現状を直視することができて白い馬に乗った王子様まで射止めることができるようになるが…。

⑦天国はまだ遠く

著者：瀬尾まいこ　　出版社：新潮社

出版年：2006年　　値段：362円

23歳の千鶴は仕事も人間関係もうまく行かないので、ある日決心して、山奥の民宿に行って、睡眠薬を飲んで自殺しようとした。だが、失敗だった。死ぬのがやはり怖いと感じて、死にたくなくなった。そして、静かな田舎で生活をし始めた。毎日、のんびりしていた。空気がいいし、食べ物もおいしいし、そこにいると心地がよかった。しかし、ある日、あることに気づいた。それは「ここには私のするべきことはない」、「自分の居場所ここにはない」ということだ。そして、千鶴はまた旅立ちをした…。

⑧世界の中心で、愛をさけぶ

著者：片山恭一　　出版社：小学館

出版年：2001年　　値段：1400円

愛する彼女をうしなった、主人公の悲しみと辛さをよく描いた小説だ。視点が時々変わって彼女がいない現実と彼女が生きている過去を行き来しながら内容が進む。現実では彼女がいない世界では生きる意味を感じられない主人公の姿を、過去では主人公と彼女が付き合っている青春の物語をいとしく描いていた。本、特に小説はあまり読まなかった私なのにこの本を読みながら悲しい顔、うれしい顔をしている自分を感じた。そのくらいこの本は面白く、感動的でもあった。またドラマとはちょっと内容が違うところがあるからドラマを見た人も見なかった人にもお勧めの本だ。

⑨火車

著者：宮部みゆき　　出版社：新潮文庫

出版年：1998年　　値段：857円

主人公和也というサラリーマンと婚約した関根彰子がある日行方不明になった。和也は警察をやっている親戚に彰子を捜してもらえないかと頼んだけれど、もっと彰子さんのことを調べると、彼女は謎のような人だと気づいた。なぜかサラ金にお金を借りていて、借金まみれで、ついに自己破産したと宣告された。職場の上司の話では、彼女の人間関係はすごく狭かったそうだ。和也は彼女の過去のことはあまり知らなかった。和也と婚約した女性は一体誰だったのだろう。

資料５－４　本の紹介文（４）

⑩ももこの宝石物語

著者：さくらももこ　　出版社：集英社文庫

出版年：2006年　　値段：533円+税

このエッセーは作家のさくらももこが、岡本さんが書いた「宝石の常識」と言う本を読んだのがきっかけで興味を持って書いたものだ。岡本さんは宝石店を経営している。本の中では親切なイメージのおじさんだ。さくらももこは岡本さんからいろいろな宝石を見せてもらうし、一緒に産出国にも行く。本文に紹介されている宝石は珍しいものではなくみんながよく知っている宝石だ。もちろん宝石の写真もカラーで載っているし、専門の知識がなくても読みやすい本だ。

⑪日本漫談

編者：西本鶏介　　出版社：多楽園

出版年：2004年　　値段：4500ウォン

日本の昔の物語を集めた本として手軽に読める。とても短いエピソードばかりで構成されていて時間を潰す時にいいと思う。どこにでもどんな時でもありそうな話として貧乏な人や欲張りな人などを素材に使っている。韓国で日本語の勉強のために買った本で、ずっと読み続けていたが、今回をきっかけに全部読みきった。日本の物語を知りたい人におすすめだが、あまり内容はないので、期待はしないで、本当に手軽に読んでください。

⑫平面いぬ。

著者：乙一　　出版社：集英社

出版年：2003年　　値段：590円

四つのファンタジーやホラーストリーが含まれている。目を見ると石になってしまった妖怪石ノ目が住んでいる山、主人公が失踪した母を捜すためそこに入った。腕に彫ってある犬の刺青が動き出すときに、ぎくしゃくした家族の間の微妙な関係も変わり始める。短いし複雑ではないので、読みやすい。読み始めたら、最後まで止められない魅力がある四つの物語だ。

⑬台湾二イハオノート

著者：青木由香　　出版社：JTB

出版年：2006年　　値段：1600円

今、台湾で仕事をしている日本人が書いた本です。この本を通じて、外国人がどんな風に台湾を見ているかわかりました。台湾人にしてみれば普通のことですが、日本

人にとっては不思議なことがあります。例えば、歩くスピード、日本では通勤時間にもたもた歩いたら負け、「朝は、戦争だ。」と書いてありました。そして、台湾人は歩くのが遅い、背後に接近しても気づかないと作者は感じたそうです。

⑭黒衣の騎士　BLACK　KNIGHT

著者：水野良　　出版者：角川書店
出版年：1998年　　値段：1000円

暗黒の島マーモを捨て、生き残りの暗黒の民を率いたアシュラムはいろいろな難関を乗り越えて、ようやく新大陸を見つけましたが自分の民はこの土地に住めません。最後に民のために自分の命を犠牲することを新しい土地の神と契約して、自分の民がやっと新しい土地に住めるようになりました。しかし、神様はアシュラムの体を利用して民を苛めています。アシュラムは本当に体がなくなったが魂はまだ生きていました。そして、神を封じるため、自分の魂を捨ててまで頑張りましたが自分の魂はなくなりました。でも、たとえ彼の体と魂がなくても、永遠に彼のことは民に覚えられていて、民にいつまでも伝えられています。

⑮がばいばあちゃんの笑顔で生きんしゃい！

著者：島田洋七　　出版社：徳間文庫
出版年：2005年　　値段：514円＋税

作者は広島出身で、父親は作者が物心のつく前になくなったので、一人で居酒屋をやっている母親とお兄さんと三人で暮らしていた。その時はちょうど戦争の終わったところで、母親の仕事が忙しくて、面倒を見る時間もないし、心配だし、で、母親が作者をばあちゃんのいる佐賀の家に預けた。その家にはお金がなかった。だからこそ、ばあちゃんからいろいろなことを教えてもらった。「貧乏人が一番やれることは、笑顔を見せることだ」とかだ。これらは作者にとって、大切な生活の知恵になった。

⑯ウエハースの椅子

著者：江国香織　　出版社：ハルキ文庫
出版年：2004年　　値段：495円

自分が一番好きな作家である「江国香織」の最も女らしい作品。これは30代半ばのある女流画家の話で、彼女は自分の仕事や恋愛、家族、人生の話をモノローグの形式で語ってくれる。昔と現在を去来しながら流れる彼女の話はとても「おいしい」。読者の五感を思いっきり刺激してくれる。特に女の読者なら、もっと彼女の感覚に吸い込まれて、自分の話だと思ってしまうくらい深く共感を覚えると思う。とっても美し

資料５－５　本の紹介文（５）

く切なく狂おしい愛と人生の物語。是非、みんな読んで欲しい。特に美しい女性なら必読。

⑰氷点

著者：三浦綾子　　出版社：角川書店

出版年：1982年　　値段：460円（上下２冊）

小説家三浦綾子の代表的な作品で、朝日新聞社の懸賞小説に入選し、大ベストセラーとなり、映画やドラマにもなって、大勢の人々によく知られている作品だ。北海道の旭川を舞台に書かれているこの物語は、辻口病院の院長啓造の家庭内のことを書いている。人間の感情、過ち、復讐など、また、人間が人間の罪を許すことなどについて書いてある。

⑱小悪魔な女になる方法

著者：蝶々　　出版社：大和出版

出版年：2004年　　値段：1300円

十八歳から五十歳に至るまでの女性達の恋愛経験の小説だ。恋の経験を通して、美しくなれるという方法を女性達に紹介している。現実の恋と想像した恋は違うので、現実の世界で美しい恋をするため、どんなことをすれば美しくなれるかとか、どんなことをすれば、素敵で魅力的な女性になれるかなどの方法が書かれている。